

---

# シルバーコード

erow

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シルバーコード

### 【Nコード】

N4716V

### 【作者名】

erow

### 【あらすじ】

極ありふれた非リア充の平穏な日々。それはある日、銀髪の少女との出会いによって抵抗する間もなく崩れ去り、主人公、如月龍二はシルバーコードと呼ばれる能力を使う人間と、ゴーストと呼ばれる化物との、非日常の戦いに巻き込まれていく。

注・この作品は、アルファルドさん（ID42646）原案の創作物です

## 未知との遭遇

つまらない日々。朝起きて学校へ行き、黒板に書かれた文字をひたすらノートに書き写す作業をして、授業が終わったら部活をして、あまり居心地のよくない家に帰る。毎日がその繰り返し。別に刺激がほしいわけではない。周りの環境も現状で満足している。これ以上何かを求めるつもりはない。あつたらあつたで楽しいだろうが、ラノベとかでよくある面倒な展開は要らない。

今日も校門から手をつないで出て行くカップルを見て、羨ましい、妬ましいと思う。しかし、今のところ彼女は欲しくない。俺が好きなのは年上だし。

それにしても、羨望や嫉妬の念を抱くのに彼女が要らないとは、どうなのだろう。自分でも疑問を抱かざるをえない。自分も彼女が欲しいから、彼女が居るから羨ましくて妬ましいのか、それとも楽しそうに会話しているから羨ましくて妬ましいのか……わかん。

「相変わらず暗い顔してるなあ、お前」

そう言っただけで後ろから声をかけてきたのは……誰だっけ。もう高校入学して二ヶ月も経つのに、クラスメートの名前を覚えてないなんてマズイだろ。しかし今更「この愚かな如月龍二めにお名前を教えてくださいませんか」などと聞けるわけがない。ああ、物凄くまずい。「俺の名前を言ってみろ！」などと尋ねられたらどうしようか。答えられずに穴に埋められて鋸で首を切られるのか？さすがにそれはないだろうが、俺の高校生活は入学二ヶ月目にして早速詰むことになる。それは避けたい。

「そんな顔だと彼女できないぞ」

「今はいらん」

そんな俺の内心を知ってか知らずか、余計なおせっかいをかけてきた。彼女については、ついさっき考えていたところだというのに。

「もし欲しくなったらどうする」

「それでこの暗い面がどうにかなると思うか？」

「思わんな」

なぜだろう。こいつとは仲良くなれそうな気がする。そうだ、この機にアドレスの交換をしてどさくさに紛れて名前を教えてもらえば……っ！ 素晴らしい名案だ。今までの人生の中でベストスリーに入る名案ではないだろうか。

そうと決まれば話は早い。早速、アドレスの交換をしようではないか。

「なあ、アドレ「ごめん、待った？」

奴の後ろから女の声。まさか、こいつも彼女持ちか。なんということだろうか、ついさっきまではこいつと友達になれそうな気がしていたのに、一気にそれが払拭され、こいつのことを敵だと認識してしまう。さすがに行き過ぎだ。

「いや、そんなに待ってない。ああ、アドレスの交換な、ちょっと待ってくれ……赤外線で送るから、携帯貸してくれ」

「……」

表情を変えずに携帯を手渡す。おそらく、こいつにメールを送ることはまず無いだろう。

「ほい、できた。なんか用があつたらメールしてくれ。じゃな」  
「ああ、じゃあな」

彼女と腕を組んで校門を出て行く奴を見送り、自分も虚しさに打ち拉がれながら帰路に就く。どいつもこいつも彼女持ちか。ああ、羨ましくて妬ましい。ファツキンリア充。リア充爆発しろ。リア充なんてみんな死ねばいいんだ。ブチ殺すぞゴミめ。

..... やっぱ空しいな。疲れてるんだろう。そうだ、きつと疲れてるからこんな事考えるんだ。家に帰ってゆっくり休めばスツキリするはずだ。

そう思い、校門を一人寂しく出て行く。家に帰ってシャワー浴びてメシ食って寝る。そうすれば、この憂鬱な気分もきれいサッパリなくなるだろう。

家への道を歩く。部活で疲れた重い体と、勉強道具の詰まったこれまた重いカバンをぶら下げて、なにもない道を、イヤホンから流れる音楽を聞きながら、やけに重い扇子でパタパタと風を作って涼みながら。気の早いセミどもがミンミンと鳴き、心地良い音楽に雑音を混ぜる。小さい頃は喜んで追いかけていたセミも、今ではただうるさいだけの虫としか思わない。

色々と疎ましい今日この頃。虫も、この糞暑い道も、コンビニが近くにない家も、リア充も、青い空も何もかも。ああ、世の中はこんなに疎ましいもので満ちている。

本来の通学路を、あえて曲がって、いつも使っているショートカットルートに入る。とは言っても、ほんの十分くらい変わるくらいの些細な道だが。しかし、この時間帯は山が影になっていて少し涼しく、夏場はかなり重宝する道だ。耐震構造がどうのこうなので廃業

に追い込まれ、廃墟となった吹き抜け構造のデパートビルもあり、そこを通ればいい風が吹くため体力を消耗することなく帰れる。このクソツタレな世の中において、数少ないありがたい場所だ。操業していてくれればクーラーが効いててもっとありがたいかっただろうが。

ちょっとした路地を抜け、件の廃墟の外周に貼られたフェンスを乗り越えて中に入る。警備員も居ないしカメラもないので、よく不良が溜まっているが、そこは活動する時間帯の関係で遭遇することは滅多にない。居たとしても、遠くからでもハッキリ聞こえるような馬鹿騒ぎをしているので、その場合は普通の通学路に戻る。あと時々廃墟マニアとか、ここがよく『出る』場所だと聞いて肝試しに訪れる小坊中坊、またはアベックなどが居るがそういうのは別に問題ない。無視して突っ切る。

フェンスの近くまで来ても、人影は見えないし、物音も聞こえない。どうやら今日は居ないようだ。教材の入った学生鞆をフェンスの向こう側に投げ込んで、自分もメートルほどのそれを乗り越えて敷地内に入る。

広い駐車場跡は地面からの照り返しがキツク、非常に辛い。しかし、そこさえ乗り越えれば……

「涼しい？」

空を見上げれば、透き通るような青い空。直射するのが辛い、眩しい太陽。風はない。

とりあえず、まっすぐ廃墟の入り口へ歩いて行く。

「……………っ!？」

なんか、今変な寒気がしたような……風邪か？ いや、そうじゃない。周りの気温が下がってきてる。

「ウウオオオオオ……」

なんか、聞こえたな……。なんか動物のうめき声っぽい。イヤホンで音楽を聞いているのにそんなものが聞こえるはずがないのに、聞こえた。

幻聴？ そんなヤバイ薬はやってない。

ノイズ？ そんな安物のイヤホンは使ってないし、ノイズだとしたらザザザって音になるはず。

歌詞？ 今聴いてるのはそれこそ何十回、何百回と聞いたお気に入りの曲だ。獣のうめき声なんて混じってない。

犬の声じゃない。猫の声でもない。猿？ 狐？ それとも熊か？ こんな場所？ あり得んな。まあ何にせよ、遭いたくないな。

「ウウウオオオオオ……！」

建物に入ると、さつきよりも近く、はっきりと声が聞こえた。そういえば、今朝の星座占い血液型占い、両方共運勢最下位だったよな。占いなんて非科学的なものを信じるわけじゃないが、なんとなく思い出した。確か、星座占いだと予期せぬ出来事にご注意ください。ラッキーアイテムは扇子。ラッキーカラーは黒、だったよな。血液型占いだと、予期せぬ出会いがあるかも、とのことだった。

所持品……水色の革財布、黒の扇子。黒の学生鞆。オツケー、きつとこれが幸運を導いてくれるに違いない。

それにしても、寒い。吐く息が白い。この寒さはおかしい。どう

なってる。寒すぎる。それに心臓の鼓動も、三キロくらいの距離を全力疾走したくらいに早く、五月蠅い。

嫌な予感がする。今までの人生でこれほどまでに嫌な予感がしたことはあつただろうか。いや、ない。

一度落ち着こう。心臓の鼓動はただの気のせい。この寒さは、廃棄されたクーラーが暴走してるだけ。そうに違いない。

上の階からするはずのない、ミシミシとかいう物音がするの、きつと気のせい。

「……………っ!!」

数歩ほど後ろの天井が崩落してきた。落ち着きながら前に進んでいてよかった。もし進んでいなければ、今頃瓦礫の下敷きに……………

「つと、まさか床が抜けるなんて思わなかったわね……………」

声からして、……………女性？ シルエットからして、同じくらしいの年か。崩落する天井、向こうからすれば床か。よく無事で居られたもんだ。

「……………げ」

その後ろから降ってきたのは、また人間？ いや、それにしてはやけに大きい。

舞い上がった大量の埃の中に見えるシルエットに目を凝らす。だんだんとはつきりと見えてくる。



．．．．．ゾンビ、だな。冷気の発生源は、どうもアレらしい。アレが降ってきたとたん、さらに寒くなりやがった。信じがたい光景だ。理解に苦しむ。

一歩ずつ、一歩ずつジリジリと後ろに下がる。

「君主危うきに近寄らず、三十六計逃げるに如かずとも言うし．．．．．」

入ってきた方向と反対側にある出口に向けて全力で駆け出す。入り口の方向は瓦礫でふさがっている。隠れる場所は、見当たらないとなると、逃げるか？ 足はそんなに速くないんだが．．．．．けど逃げないと確実にマズイ。何がまずいって、そりやもう命が危ない。逃げないと死ぬと本能がガンガン警鐘を鳴らしてる。

あれ？ あの女の子、こっち向いてる．．．．．あ、走ってきた。

「こっち来んなよ．．．．．」

おまけにゾンビも走ってきてるし。ゾンビは普通走るもんじゃないだろ。

「グルウウアアアアアア！！」

「キヤアッ！！」

叫び声に振り返れば、ゾンビに殴られてこっちに飛んでくる銀髪の女の子。とっさに受け止めたが、飛んでくる人間を受け止めるなんて無理がある。受け止めたはいいものの、ふんばりが効かずに後

るに転がってしまった。

「うえ．．．．．マジか」

目の前にはでかいゾンビ。本気でキモイし臭い。

腕を振り上げ、それが真横から振られる。反射的に鞆を盾にしたが、大型の獣に殴られるような衝撃を感じ．．．．．

「フグウツッ!!」

カバンごと吹き飛ばされ、無様に地面を転がることになる。殴られた衝撃でが体の芯まで響いたようだ。上手く立ち上がれない。軽くめまいがする。全身が痛い。特に腕が痛む。骨が折れたかもしれない。

けど、防いでなかったら確実に頭が砕け散ってた。

「グエツグエツグエツ．．．．．」

「くそ、このやろう!」

面倒くさいことになった。一体誰だ。何かしら刺激があったほうが楽しいって言ったバカは。痛いし、ムカつくし、面倒くさいだけじゃねえか．．．．．

また、ゾンビが鈍重に太い腕を振り上げる。しかし、それを避けるすべはない。かばんは飛ばされた。持ってるのは鉄製の扇子だけ。絶望的にも程がある。

獣の太い腕が振り下ろされる。俺死んだな。

「．．．．．」

走馬灯現象という奴だろうか。ゾンビの動きが、急に鈍くなった

ような気がする。

少しずつ振り下ろされる腕。これを好機と思っても、足が震えて思うように動かない。

映画でよくある死亡パターンだな。

「どけ！」

「はぐっ!!！」

諦めて死を受け入れようとした瞬間、誰かに蹴り飛ばされた。ゾンビのパンチよりは軽いが、また床を滑ることになった。

助かった。いや、助けられたというべきか。感謝すべきだが、蹴られたことは少々腹立たしい。

「ゲホッ、いてえな……」

「さっさとその女連れてどっかに行け！ 邪魔だ！」

何もないとところから水の壁がせり上がり、俺とゾンビの間を遮る。訳がわからないが、とりあえずその言葉に従い、気絶した少女を背負い、出口へと走る。

何が何だかわからない。何がどうなっているのかもわからない。ただ、今まで呑気に過ごしていた生活が今この場所で徹底的に崩されたことは確かだった。

## 非日常へのカウントダウン

side Ryuji

自分の行動に後悔は付き物だと、いつものことだが思ってしまった。あるときあしておけばよかった。こうしておけばよかったなどと後になってから思ってしまう。

そして、今回もだ。病院に連れていかず、家のソファに寝かせている銀髪の女の子。なぜ俺はこの子を真っ先に病院に連れていかなかったのかと、今更ながらに思う。

「……さて、どんな言い訳をするか、聞かせてもらおうか  
龍二」

そして、隣で俺を視線で射殺さんばかりに睨みつける親父。

「待て親父。きっとそれは誤解だ。俺は年上が好きなんだぞ？ な  
のになんでこんなどっからどう見ても同年代の女子をさらわないと  
いけないんだ」

「私がお前くらいの歳にはな、女なら誰でもいいと考えることもよ  
くあった。さあ白状しろ。どこで攫ってきた！」

「俺の持つてるAVは全部人妻ものって知ってるだろ」

「そんな事は聞いていない。真実を話せ！」

本当のことを言って信じてもらえるならとつくに言ってるっての。  
おとなしく本当のことを話したところで、精神科に連れていかれる  
に違いない。

「廃墟で倒れてたのを助けてきたんだよ」

「なぜ病院に連れていかなかった」  
「.....」

それを言われると非常に困る。答えようがないからだ。

「やはり何か人に言えないような事情があるんだろう！」  
「違うっつの」

「.....ならどうして話さない」  
「普通ならありえない、信じてもらえないような話だ」  
「それが本当なら信じてやらんこともない。言ってみる」

仕方ない。この際白状するか。このまま誤解されたまま終わるのは気に入らない。

「化物に襲われて気絶したのを拾って逃げてきた。病院に行かなかったのは、説明のしようがないから」

「私が今まで生きてきた中で、一番信じられない話だ」

「どうしても信じられないなら信じなくていいぞ。俺だってそのボロボロになったカバンがなかったら白昼夢で済ませた」

「.....見せてみる」

「はいよ」

椅子の下に置いていたカバンを引っ張り出し、親父に見せる。側面にはまるで大型の肉食獣の爪に引き裂かれたように破れていた。もっとも、破いたのはゾンビみたいな化物だったが。

「これは.....ひどいな。まるでライオンか虎に引っかかれた痕みたいだ」

「街中にそんな獣が居るとおもつか？」

「動物園から逃げ出した、なんて話があればすぐ放送で流すだろう」

しな。本当、なのか。信じがたいが」

「息子のこと信じられないなら、その子が起きたときに話を聞いとけ。俺は買い物してくる」

ソファを占拠したまま起きてこない少女を一瞥し、玄関へ向かう。あのいけ好かない親父と一秒でも一緒に居るのは耐えられない。

「ついでにタバコ買ってこい」

「死ね。糞親父」

ドアをわざと大きな音を立てて閉め、玄関へ直行する。息子にタバコ買いに行かせるなんて何考えてるんだ。

side out

side father

「……さて、どう信じたものか」

息子の言っていたことは、内容こそ信じがたいものであった。しかし、嘘は言っていなかった。医者であり、多くの仮病患者を見破ってきた私がそう判断するのだから、まず間違いない。

しかし、不自然なところもある。なぜこのソファで眠っている少女がわざわざ廃墟に居たのか。なぜそのような『化物』とやらに襲われたのか。どうやって逃げ帰ったのか。疑問は尽きない。

話の内容とは離れているが、少女の髪もまた不自然。髪の色は銀。脱色しているようには見えないので、おそらく地毛だろう。

「先天性色素欠乏症か」

もしそうだとしたら、少々不自然だ。アルビノは総じて体が弱く、外を一人で出歩くはずがない。しかし脱色しているようには見えな  
い。

まあ、この際それは捨て置こう。それよりも、だ。龍二はこの少女は化物とやりに襲われていたと言った。着衣の汚れの付着具合からして、それは嘘ではないだろう。

だが、丈夫なはずのカバンがあのような力を受けて、こつもスヤスヤと眠っていられるはずがない。それはおかしい。普通なら重傷もしくは致命傷を負っているはず。となると、何かしら異常があるのか。

「ベタなフィクションじゃあるまいし……偶然に決まってる」

世の中には熊と正面から戦って撃退した老人も居るのだから、奇跡のような偶然も十分に起こりうる。そういうことにして納得しておいた方が、楽でいい。ただでさえ仕事で疲れているのに、わざわざ休日に頭を使う必要もないだろう。

side out

side Ryuji

家から出てしばらく。クソ暑い中自転車を漕ぎ続け、ようやく目的地のデパートに到着した。外と比べ、冷房の効いている屋内はまるで天国のようだ。

「おい、龍二」

と思ったら、偶然にもリア充と出会ってしまったしまった。うむ、  
実に胸糞悪い。

「よお、無事に逃げ切れたようで何よりだ」

「.....」

見れば、こいつは俺を助けてくれた(？)リア充。これは、助け  
てくれてありがとでも言うべきか？ 言うべきなんだろうが、  
何故かこいつの面を見ると無性に腹が立つてくる。リア充だからか  
やはりリア充というものは、非リア充に対して嫌悪感を抱かせると  
いう特殊な効果を持っているようだ。

「ああ、礼ならいい。俺としても、危険に晒されている女の子を見  
過ごすわけにはいかないからな。お前を助けたのはそのついでだ」  
「ウザ」

言ってることはもつともなのだが、キザな雰囲気はどうも受け入  
れられない。受け入れられないが、しかし恩には礼をもって返さな  
ければ。それが礼儀であり、常識という物。非常に気に食わないが、  
ここは素直に礼を言っておこう。

「しかし、助けられたのは事実だ。礼を言わせてくれ。.....  
助けてくれて、ありがとう」

「む、男に言われてもな。できればあの銀髪の子に言われたかった」

腹がたつ。果てしなく腹が立つ。助けてもらって、礼を言った。  
それだというのにこの態度。立場としては相手が上だからそれもま



た仕方ない。仕方ないのだが、頭じゃわかっていても……  
というやつだ。理性と感情は相容れないことがあるということ、  
ここで俺が殴りかかったとしても何も文句は……言われる  
だろうな。

「ところで、単刀直入に尋ねるが……あの化物が見えたか？」

「あゝ、化物？　どんな？」

「あのでかいゾンビみたいなやつ」

ここはどうするべきだろうか。見えていたと正直に答えれば、何らかのアクシデントに巻き込まれるのは、ラノベでよくある展開ではないだろうか。もっとも、ここで嘘を言ったとしても、嘘だというのはすぐにわかるだろう。

……あれ、詰んでね？

「……」

「沈黙、ということとは肯定か」

「まあ、見えてないって言ってもどうせアレだろ？　嘘だってわかるだろうしな。で、どうする？　解剖するか、誘拐するか、はたまた口封じか？」

「そんな物騒なことするはずないだろ」

ひとまず安心した。そういう事がないなら、心配することもないだろう。

「話はこれだけだ。じゃあ、また学校で会おう」

「じゃあな」

半額シールの貼られた肉と、ネギやら大根やらの野菜が入っているマイバッグ片手に爽やかに去っていくイケメン。非常にシユールだ。あまりにシユールすぎる。

「って、こうしちゃいられん。タイムセールで割引になった卵と肉を買わなきゃならんのに、貴重な時間を使わせやがってあのやろう」

さっそうと去っていったリア充に対する陰口をグチグチと言いながらも肉と卵に群がる主婦たちを死力を尽くしてかき分け、精神に重い傷を追いながらもなんとか入手。その後は適当に割引ではないが、いつでもお買い得な野菜をいくらかと、割引でも何でも無い原価のアイス買ってきた。まったく、主婦のパワーはある種あんな化け物よりも恐ろしいものがある。

会計を済ませれば、あとは家に帰るだけ。糞暑い中をまた自転車漕がなければならぬが、アイスがあるだけ来る時よりマシだろう。

移動中……………

「はあ……………涼しい」

クーラーの風の当たる場所に椅子を動かして、そこで本を読む。やはり家は天国のようだ。親父さえ居なければ。冷房は聞いている。調理器具も揃っている。本もある。ゲームもある。大画面の液晶テ

レビもある。あの親父さえ居なければ、本当の天国にも成り得る場所だ。

「龍二」

「……………なんだよ」

「あの子が起きたぞ」

「あっそ。で、なんか言ってたか？」

「特に何も。聞きたいことがあるんだろう？ さっさと行って聞いてこい」

「言われなくても」

冷蔵庫からスポーツドリンクの入ったペットボトルを取り出す。それを飲みながら、件の少女を置いていた部屋に向かう。

「おはよう。って時間でもないが、気分はどうだ」

「あなたは……………そういえば、あの時居たわね」

「気分が悪いとか、そういうのはなさそうだな。無事で何よりだ」

腕を組んで頷く。変に気分が悪いとか、怪我を負っていたりかしたらまた面倒だしな。これから追い出すのに。

「あなたもアレに襲われて、災難だったわね」

「災難だった。ああ、実に災難だった」

「ごめんなさい。あれ、私が「ちょっと黙れ。そういうのはどうでもいい」

急に謝罪をした彼女を、言葉で制する。彼女が何を言おうとも、これからすることに変わりはないのだ。変に感情を動かされ手も困る。

「どうでもいいって、あなた自分に起きたことがなんだか知りたくないの？」

「知りたいわけあるか。俺は静かに暮らしたいんだよ。無事なら出て行け」

我ながらもう少し言いようがあるだろうと思わないこともない。しかし、こいつが居ると何かよろしくないことが起きると俺の勘が告げている。

「……そうよね。じゃあ、大人しく去ることにするわ」

「是非そうしてくれ。餓別はなしだから、その点は留意するようにはい、さようなら。二度と会わないことを期待してる」

「冷たいわね」

「見知らぬ他人に優しくする義理はないな」

それだけ言って部屋を出る。彼女が出ていくか否かは別にどうでもいいとして、今日は寝る。全て夢だったことにして、忘れてしまおう。でもその前にシャワーを浴びないと、少し気持ち悪いな。シャワーでも浴びて寝よう。

よし、そうしよう。

## 未知との遭遇

今日の朝も、いつもと同じ携帯電話のアラームで目が覚めた。タッチパネルに出てくるOKのボタンをタッチし、結構な音量のアラームを停止させる。ちなみに、音の設定はソナーにしてある。そこまでうるさくないし、いい具合に起きやすい。しかし眠いものは眠い。だが起きないわけにもいかないので、布団から出たくないという欲求を我慢しつつベッドから降りる。寝る前に占めていたカーテンを開き、窓も開いて空気の入れ替えを行う。朝の清々しい空気というのは、実に素晴らしいもの……ではない。生温い空気が顔を撫でて、不快感のみが襲ってきた。だが、開け放たれた窓から覗く空は、今日も清々しい快晴。天気予報を見なくとも、昼からの猛暑が安易に想像できる。昨日のは寝る前に、化物の出たあの廃墟に行ってみようと思ってたが、この天気では天火で丸焼きにされるだろう。

「……………」

しかし、一度気になっていたものを放り出すのも少し気に入らない。帽子でもかぶって出れば、少しは日差しもマシになるだろうか。日に焼けてどうなるということはないが、元来ひきこもりがちの俺にとつて、真夏のキツイ日光は心地良いものではない。

「降りよ」

降りて、飯を食って、顔洗って歯を磨いて。それから出かけるとしよう。日々の生活リズムを崩しては、体の調子も崩れかねない。いつもどおり、ジーンズとシャツに着替えて下の階に降りる。

その後は、食パンを一枚オーブンで焼いて、焼いている間にイン

スタントコーヒーを入れて、焼きあがったものにジャムを塗って食べる。サラダとか、目玉焼きはない。これが毎日の朝食。そういった付け合せがあればいいとは思うが、わざわざ作るのは面倒。パン一枚とコーヒーだけで、空腹は満たされる。

「ごちそうさま」

手を合わせ席を立ち、ジャムを冷蔵庫にしまい、使った食器を全自動食器洗い機に入れる。そのあとは洗面所で歯を磨き、顔を洗い、財布と携帯を持って外へ出る。帽子と日焼け止めは、探るのが面倒くさいのでやめた。

玄関はまだ日陰になっているからいい。しかし、日陰から日向に腕を出せば、思わず顔をしかめるほどの熱量をもった光。外にフライパンを置いておけば自然に目玉焼きができそう。出来上がる前にガラスに食われるだろうが。

それにしても、暑い。やはり帽子は必要だったろうか。しかし探すのも面倒くさい。この暑さの中、目的地へ行くことを想像すると気力がガリガリと削り落とされる。高校球児じゃあるまいし、我ながら正気の沙汰ではないと思う。

しかし、しかしだ。一度決めたことを覆すのは男らしくない。こんな非リア充の俺が男らしさを語るのもまた滑稽な話だが。

俺が外に出たくないのは、気力の問題だ。途中で力尽きて家にとんぼ返りするのは嫌だ。しかし、好奇心からくる衝動はなかなか抑えがたい。これが野次馬根性というやつだろうか。たぶんそうなのだろう。

では、気力の湧くようなことを考えよう。あの廃墟で、美女が露出プレイをしている……くだらん妄想だ。実にくだらない。だが、それがいい。

「.....よし」

氣力にゲージがあるとするとするなら、ゼロから一気に五十まで上がった。こんなくだらない妄想で氣力が湧いてくるのは、枯れた十代といえど立派な男であることの証拠だろう。焼けるような熱量を持った日光を浴びながらも、車庫まで歩いて行く。

黒光りする流線型のフレームに、ゴムの色そのままの黒いタイヤ。重量感のあるエンジンに、大きな排気筒。ハンドルにかけられたフルフェイスヘルメット。は親父の愛車で、その隣に置いてある安っぽいママチャリが俺の相棒。それに乗って、灼熱地獄とも言える暑さの中を、昨日の廃墟に向けて走っていく。自転車は走っている間は風があるせいで暑さも感じないし、汗もかかない。止まったときに一度に湧いてくる。

移動中.....

それなりのスピードの出ているママチャリで、急ブレーキをかけてドリフト気味に停止する。目の前には昨日の廃墟。回復した氣力が底をつく前に、なんとか昨日の廃墟にたどり着くことができたようだ。

あと、肌が妙にヒリヒリすると思ったら、露出していた部分が赤くなっている。日焼けだろう。いくらなんでもこの短時間で少し焼けすぎではないかと思う。

「暑い……」

この暑さも、目の前の廃墟に入れば多少楽になるだろう。この焼けるような暑さは、八割方日光によるもの。残り二割の内の一割は、地面からの反射熱。だから、建物に入れば多くて九割、最低でも八割は軽減されるはず。

自転車を押して、日陰に鍵をかけて置いておく。まあ、こんな鍵、本気で盗もうとする人間なら器具を用いて壊すだろうが。

自転車を置いて建物の正面に回り、心無い人に寄って叩き壊された、ドアの役割を果たしていない自動ドアから堂々と建物に侵入する。

建物の中は想像した通り風が通っていて涼しく、なかなか居心地が良い。しかしここでのおんびり休憩しては、目的を達成できない。目的と言っても、そこまで大したことではないのだが。

「……む」

崩れ落ちた壁の残骸をよじ登っていくと、残骸の向こう側で銀髪が翻るのが見えた。この薄暗い中でも実によく目立つ色をしている。出していた頭を引っ込めて、彼女の様子を伺う。周囲を見回し、何かを探しているようにも見える。

「全く、何しに来たんだか。こんな危ないところに」

そんなものは少し考えればわかる事だ。自分と同じ目的か。それとも行く場所がないからなんとなくここに来たか。ただ涼みに来ただけか。あの様子からして、最後まで二番目はないだろう。

だとすれば、俺が知りたい事も何か知ってるだろうか。知っていれば聞くこともできるかもしれない。



「行ってみるか」

昨日はああ言ったものの、やはり人間は知的好奇心を満たさない限りは他のことに手を出そうとも、手につかないというのが現実。瓦礫の上から足を滑らさないよう注意しながら身長に降りていく。

「こんなところで何してるんだ？ 落し物でもしたか？」  
「誰！！」

振り向きながら何かキラキラ光る物を投げてきた。ろくに狙いもつけていなかったので直撃はしなかったが、割と近くに当たって甲高い音を立てて粉碎した。

音と、砕けたものを見るに、ガラス片だろう。また物騒なものを投げる。当たらなかったからいいが。

「って、あなただったの。そっちこそ何してるの」

物騒なものを投げた謝罪はなしか。ガラス片とて、当たりどころが悪けりゃ死ぬかも知れないのに。

そう頭の中でつぶやきながら、瓦礫の山から降りていく。まあ、自分が相手の立場でも当たらなかったからいい、と言って返すだろう。

「質問には答えでもって返すのが妥当じゃないのか」  
「昨日は知りたくないって言ってなかった？」  
「そうだな」

昨日の自分の発言だ。忘れているはずがない。忘れていたら若年性アルツハイマーかと疑うところだ。

しかし、過去の発言など覆してなんぼ。政治家の偉いさんだって  
そうするんだ。俺だってそうする。

「人間は知的好奇心から逃れられない生き物らしいと身を持って実  
感した」

「……もう少しわかりやすく」

ふう、と一度ため息をついて、その要望に応える。

「気が変わったんだよ。気になって眠れなかったってわけじゃない  
が」

「はあ……そうなの」

「そういうことだ。さ、教えてくれ」

「ごめん」

彼女の口から出てきたのは、なぜか謝罪の言葉。どういうことか  
は、態度で大体予想がついた。大方教えられない事情があるとか、  
自分もよく知らないとか、そんなところだろう。さて、果たしてどっ  
ちか。

「教えられるような事は、覚えてないの」

「はっはっは、殴られて記憶が飛んだか？」

そんなベタな展開があるはずない。あっという間はさすがない。認め  
られるか、こんな事。俺が期待していたのは、もっとこっぴどく心踊る回  
答だったのに、まさか覚えてないとは。

「それよりも前から記憶があんまり無いの。自分の名前まで忘れて  
るみたいだし」

ジーザス。何も知らないどころか記憶喪失なんて、そんなの有りかよ。有りなんだろうな。実際目の前に居るし。

「ところで、後ろの人はあなたの兄弟か何か？」  
「後ろ？」

その言葉に反応して振り返ると、確かに第三者が見れば兄弟と勘違いしてもおかしくないそっくりさんが、瓦礫の山の上に立っていた。

しかし、物音は全くしなかった。この瓦礫の中を音を立てず歩くことは至難の業だろうに、よくやるものだ。

「いや、俺兄弟居ねーし」

姉なら居るが、何年か前に失踪した。

「つか、その見知らぬ人。そんな所に立っていると危ないぞ」  
「……」

だんまりか。人がせっかく善意で注意してやったのに、動きもせず、まばたきすらせずじつとこちらを見ているだけ。なんか背景と、廃墟独特の静けさも相まって非情に不気味だ。

「聞いてんのか？」  
「……」

そしてまただんまり。耳が聞こえないのか？ そうだとしても、何か言ってるのはわかるだろうに。

「イタダキマス」

「は？」

その直後、そっくりさんの口が裂けたと思っただら、そこから飛び出たナニカが喉に食らいつき、視界が上下に反転。自分の体をまじまじと見つめることになった。

普通なら激痛、なのだろうが、不思議なことに痛みはほとんど感じない。ただ、肉体の感覚が消え失せ、呼吸ができないことに苦痛を覚えただけ。

「え？ ちょっと、何？ ナニよこれ！？」

「……」

そんなのは、俺が聞きたい。そう口に出そうとしたが、呼吸ができないので口を金魚のようにパクパクと開閉することしかできなかった。

地面に落ちた自分の頭を探すかのように体が少しの間動きまわるのは、何よりもおかしかった。

## 消えた理性

気がつけば、周りが真っ白な世界で浮いていた。どこまでも白く、果ての見えない白い世界だ。周りの温度は暑くもなく寒くもなく、光も暗くもなく明るくもなく。なんとというか、不思議な場所だ。こういうのが死後の世界と言うやつなのだろうか。

「ん？ 死後？」

ふと首をかしげる。なぜ死後の世界などという物騒なワードが急に浮かんできたのだろうか。それに、そもそも俺はこんな場所にはいなかった。俺がいた場所は、こんな真っ白の場所とは正反対の、瓦礫がそこらに転がって、薄暗くて気味の悪い廃墟だ。なぜそんなところに行った？ 昨日の化け物が気になって調べに行った。そこで何かわかったか？ 少女が居たが、何も聞けなかった。そこから・・・どうなった？

首にチリチリとした痛みが走ったので軽く触れると、ヌルリとした液体が手に付いた。同時に、鉄錆のにおいが鼻をついた。血の感触と、臭いだ。

「ああ、なるほど。道理で」

全部思い出した。首を食いちぎられて死んだんだった。

それなら死後の世界なんて言葉が真っ先に浮かんできたのも頷ける。首を食いちぎられて死んで、それを無意識のうちに知覚したんだろう。我ながら器用なもんだ。それにしても、死後の世界が実在したなんて、驚いた。イメージとはかなり違うが、死んで目が覚めた場所がここなんだから、そうと認める以外にない。三途の川、川渡し、閻魔の裁きなんてのは所詮人間の妄想らしい。まあ、それ

も当然か。死者のたどり着く場所を生者が精巧に再現するなんてできるはずがないんだからなあ。それにしても……腹が立って仕方がない。何に腹が立っているのかは明確だ。あの化け物と、自分自身の行動だ。

叫んでも仕方がないのは分かっているので叫ばない。大声を出してどうにかなるというのなら、喜んで出そう。しかし、そんなことはまずあるまい。

「……どうしてこんなことになったのやら」

それは自分が一番よくわかっている。家で大人しくしていれば。今朝の時点で思いとどまっていれば。昨日近道を選ばなければ。こんなことにはならなかった。

どこかで選択肢を一つ変えていれば、あの化け物に襲われて死ぬこともなかっただろう。だというのに、俺は後先考えずに行動し、あんなみじめな死を迎える羽目になった。俺は実にはかだなあ。

「ん？」

白い世界の端。視界の端。ここが真っ白でなければまず気付かないだろう大きさの黒点が現れた。その黒点はあまり時間を置かずに肥大化し、白を侵食して黒に染めていった。灰色は存在しない。あるのは儂げに抵抗しながらも飲み込まれる白と、その白を飲み込む黒だけ。真っ白だった世界が黒に染まるのには、あまり時間を要しなかった。そして、白が消えると、周りの黒が一斉に体を犯し始めた。腹を割かれ、腸を生きたまま引きずり出されるような気持ち悪さに襲われ、思わず口を抑える。その気持ち悪さが消えると、今度は手足の指を一本一本鋏で叩き潰される痛み。それが去れば、次は腕と足。ベルトサンダー。電動ヤスリで手足の末端から肉を骨ごと徐々に削られていく痛み。

腹、指、手足とくれば、次は予想がつく。

眼の前に、俺を食った俺そっくりの化物が現れる。そして大きく口を開き、ゆっくりと頭を口の中に収め、勢い良く閉じた。意外なことに、痛みはやけにあっさりとしたものだった。これで、やっと痛みから解放された。

目を閉じれば、今までの人生の記憶が濁流のごとく頭の中を走っていく。数年前に事故で死んだ母、それを見る父の悲しそうな顔、母と同じく事故に遭ったものの、死体は見つからず行方不明となっている姉。

もし姉さんが生きているなら、会いたかった。

「……」

記憶の中、おぼろげになっている姉に向け、手を伸ばす。そして、弾かれる。

「まだよ。まだ早いわ」

「何が、っ!？」

見えない何かに肩を捕まれ、凄まじい勢いで後ろへ引かれる。肩がもげるのではないかという勢いだった。

「……まだ、ね」

意識が黒から白に引き戻され、そして差し込む光に思わず目を瞑る。少し落ち着くと、周りが灰色になったので目を開ける。

「……ここ、は」

「イヤ！ 来ないで!!」

眼の前には、顔だけは姉に似た銀髪の少女。来るな、とはどういうことだ。たしかに近くに近くにいれば嫌がるのはおかしくもない事だが、ここまで拒否されるほどでもないだろう。

いや、マテ、待つんだ俺。俺はついさっきまで死んでいたはず。なんでこいつがいる。

「まさか、生き返った？」

そんな馬鹿な。首を食いちぎられたのに生き返るなんてそんなアホな。アホか馬鹿かどっちかにしろ。でも現に意識があるし、あつちに俺の服を着た首なし死体が転がってるし。

死体？ 死体だ。首から上がなくて、傷口から流れる血が、なんとも食欲をそそる香りを出している。

マテ、マテマテ、血の匂いで食欲をそそられるなんてありえないだろう。

「な、なあ」

「来ないで！」

ガラスの破片が顔面に飛んできたので、思わず手で止めてしまった。しまったと思ったが、痛みがないので手を見ると、切り傷一つ無い真っ白な肌と、砕けたガラス。

「……」

「来ないでつてばあ！」

いくつもいくつもガラスを投げられるが、いくら当たっても体は傷つかない。それよりも、飛んでくるガラスに赤い水滴。血が付いているのは、投げている人の手が傷ついているからだろう。



「……」

なんて、おいしそうな匂いなんだろう。そう思い、ゆっくりと歩み寄る。歩み寄れば、同じ分だけ後ずさる。

一步、二歩、三歩、四歩。

「キヤッ！」

五歩目で彼女が尻餅をつく。手を切ったのか、また匂いが濃くなる。腹が減る。

「い、いや……来ないで」

何か言っているが、何を言っているのかは聞き取れなかった。ただ血の匂いを嗅ぐと、腹が減って仕方がなかった。

彼女が後ずさりを続ける内に、壁にぶつかって、それ以上後退できないうちにきた。

彼女の手を取る。顔を近づけ、錆のような匂いを存分に堪能する。

「ヒッ！」

肺が血の香りで満たされると、もう自制が効かなくなってしまう。いけないとは理解しつつも、傷口から滴る血液に舌を這わせてなめとる。極上の蜂蜜のように、とろけるような甘さが脳髓に叩き込まれる。耐え切れず、傷口を直接舐める。

「や……」

刺さったガラスが舌に触れ、不快な気分になる。舌先で傷をこじ

開け、ガラスを排除。また血液が流れ出るので、それもまた舐めとる。舌に触れる柔らかい肉の感覚が心地いい。このまま噛みちぎりたくなる衝動を抑え、血を舐め続ける。怖がる声がスパイスとなり、一層味を引き立てる。

「いや、いやあ……」

傷口の血が止まってしまった。まだ飲み足りない。

一度体を離す。恐怖からか羞恥からかは知らないが、横を向いている。白い喉が、食らいついてくれと言わんばかりにこちらに向けてられている。

喉を引き裂けば、それこそ浴びるほど血が飲めるだろう。けれど、それではもつたいない。一度で飲み切るにはもつたいない。毎日、少しずつ。長い間楽しもう。殺すにしても、もっと怖がらせたいほうが味が良くなる。

白い首に顔を近づけ、浮いている汗の玉を舐める。

「ひう!?!」

血には遠く及ばないが、いい味がする。汗の流れた跡に舌を這わせ、徐々に下に向かう。

「う、うん…やめて…」

首から鎖骨へ、鎖骨から胸元へ。服を脱がすのは面倒なので、舌を伸ばして汗を舐めとる。

やはり血が一番。首を少しだけ傷つけて、少しだけ血をもらおう。そつやって、首の皮に歯を立てる。

「……」

怯えている。自分が獣の牙に食われると思って怯えている。

ガラ……

「!」

食事の時間は、闖入者により邪魔されることになったようだ。

瓦礫の上から降りてくる、不定形の醜い生き物。臭い、全く美味くなさそうな匂い。この美味そうな匂いにつられて寄ってきたか。

食欲が失せた。責任をとってもらわないと。どう責任を取らせる？ 消えてもらう。臭い肉の一片すら残さず消えてもらう。

こんなに臭いと、食事どころではないからな。

「ニゲルナヨ」

そう釘をさして、その場を離れる。人の餌を横取りしようとする下衆には、相応ノ報いを受けてもらワナイとイケナイな。

キヒヒ、邪魔をシた罰ダ。

又メ又メとした気持ちの悪い動き。俺の体だった物体に覆いかぶさり、血と肉を食らった。そして、俺の体だった物体と同じ姿に化した。

「あ、あ……ア」

首がない。醜悪ダ。化けるなら、もう少し上手く、美味そウに化けてもらわないと。俺ノ体がかわいソウだろう。

ゆらゆらと、気味悪く揺れながら寄ってくる物体。気分が悪い。こつも醜いと、物体といえど同情する。

消えてもらわないと。

軽く走る。そのつもりが、一步で距離を詰めていた。ただ吹き飛ばすつもりで殴る。拳が肉を突き破った。感触が気持ち悪かったので、腹を蹴り飛ばす。ただし今度は貫通しないよう、軽く。吹き飛んで、壁に叩きつけられて破裂した。

脆い。あんまりに脆い。おまけに臭い。最悪だ。気分が悪い。

「ギイイ」

まだ居るらしい。今度はさっきのような不定形ではなく、ちゃんとした形を持っているものばかり。

今度八楽シメルカ？

「キヒヒッヒ」

side out

side ????

やれやれ、今日はなんでこんなに化物ゴーストが多いんだ。こんなに一箇所集中して現れるなんて、今までなかったのに。珍しいというか、面倒というか。

部屋を覗き込み、数匹まとまっているとところに炎を放つ。火達磨

になり、のた打ち回るゴーストに、温度を高めた炎を打ち込む。それで消し炭になって、このブロックは制圧完了。

「次へ行くぞ」

「はいよ」

後ろを警戒する仲間を背に、次のブロックへ移動する。すさまじい破壊音が響いているから、結構な戦闘が予想されるだろう。覚悟を決めて、瓦礫を排除してドアを開く。

「……」

戦っていたのは、先に到着していた仲間ではなく、一人の、高校生位の男だった。外見は。

普通高校生は殴ってゴーストをふっ飛ばして壁に叩きつけたりしない。蹴りで足がゴーストの肉体を貫通したりしない。ゴーストの攻撃を受けながら奇声を上げて笑ったりしない。

人の形をしたゴーストだろう。

「スリーカウントで攻撃する。援護してくれ」

「符術師に援護を求められてもねえ。ま、やることはやるさ」

周りの空気を燃焼させ、普通よりも高温の炎を作り、弾丸のように撃ち出す。

「炎弾！」

「爆砕符！」

少し遅れて、炎に反応して爆発する特殊な符が投げ込まれる。

着弾して火達磨になったゴーストに札が張り付き、二ト口でも染

みこませているのかと聞きたくなる爆発が起きる。

「やったか？」

「フラグ乙。結界頼む」

半透明の壁が張られ、そこにさっきまで暴れていたゴーストが突っ込む。燃やしてやろうと炎を灯すが、結界にひびが入って突破された。全く見えなかった速度が目視できる程度の速度まで収まったが、結構な勢いのままリアットを食らって吹き飛んで壁に叩きつけられ、その衝撃で内蔵が暴れる。

当然、化物がそれで終わるわけ無い。本能で動くゴーストが、こんな中途半端なところで止めるはずがない。

「キヒツ！」

案の定。鋭い爪の生えた手が目の前に。体の真横で爆発を起こして、動かない体を吹き飛ばして回避する。結構な火傷を負ったが、あとで治してもらえばいい。地面を転がり相手から離れると、また突進してくる。それしか能がないのか。確かに効率的だが。

急いで炎の壁を作るが、無駄無駄無駄無駄あ！と言わんばかりに突き破って首をつかまれる。即興の壁ではこんなものだろう。

「クソツ、こんな新人に任せんなよ・・・」

こんなのは、俺みたいな新人じゃなくてもっとベテランにまかせるべきだと心底思う。

腕を間に差し込んで絞殺されるのはなんとか避けているが、人間と化け物じゃ身体能力が圧倒的に違う。技術なんて関係なしに、こ

のままじゃ首をへし折られて死ぬ。

もちろん死ぬつもりなんては微塵もない。腕はふさがっているが、足は空いている。

「いい加減に、放せ化物が！」

片足で顎を蹴り上げる。馬鹿力での拘束が少しだけ緩んだので、体をねじって離脱。そのままもう一発蹴りを当てて、力技で距離を離す。

そこへ横から札の追撃が入り、化物との距離がさらに開く。

「攻撃用の札は今ので品切れ。あとは任せるよ」

「炎刃」

発火能力で発生させた火を、腕に纏わせる。ジリジリと肉の焼ける匂いと音がするが、どうせ後で治してもらえるので無視。痛みもない。本来は不定形の炎を固めて、剣の形を取らせる。

中々遠距離が一番戦いやすい距離なのに、火力が足りなくて歯が立たない。故に出した切り札だが、勝率はゼロに近い。反則級のスピードに目がついて行けないので、反射で対応するしか無いのが悲しい。おまけに使える時間が限られてるし。

「来いよ化物！ エサは目の前だぜ！」

「……」

人にしか見えない顔で、こちらを嫌そうな目で見るゴースト。怯えているのか、暑さに耐えられないのか。

どちらにせよ、はやく跳びかかってくれないと腕が完全に炭化しそうだ。

「エサ！」

ダッシュというよりも、水平方向への跳躍と言っべき速度。真っ直ぐ突っ込んでくるそれに対して、炎の剣を振り下ろす。

「……やっぱり無理」

見事に空振りし、脇腹をかじり取られた。傷口を焼いて閉じる。痛み？ 麻痺してる。

後ろを向けば、反転して飛びかかってきたヤツが大口を開けて、俺の首を狙っていた。

「ふんぬ！」

今度はなんとか受け止めることができた。そして、一瞬の隙を作り出すことができた。

「俺の、勝ちだ！」

炎に包まれた腕を、ゴーストの腹に突き刺す。新たな贅を得て、喜び勇むように勢いを増す炎に包まれ、全身を焼かれるゴースト。

そのまま焼かれて消滅しろ。塵は塵に、灰は灰に、思念は思念に還元されてしまえ。

「クヒッ」

何が可笑しいのか、口を三日月のように歪めて笑う。心底可笑しそうに笑う。笑っている余裕など有るはずないだろうに。

「ヒヒヒヒヒ！！」



「そんなのありかよ」

舐めるように全身を覆っていた炎が弾ける。弾けて消える。最後の切り札が、いともアツサリと無力化された。

巫山戯てる。なんだよ、こいつは。

そんなのはわかってるだろう？ 化物だ。俺たちが狩るべき化物。同時に、俺たちを狩る化物。狩って、狩られて、その連鎖。ついでに、ついでには俺がこいつの仲間を狩っていた。

化物が口を開いている。そして今度は、俺が狩られる番。

「畜生……」

## 血塗れの人

目の前にあの人が迫ってきた時、殺される、食べられると思って恐怖で意識が少し飛んでしまっただけから、どのくらい経っただろう。意識は完全に覚醒していても、全身に麻酔をかけられたように、首から下は指先ひとつ動かさない。

『逃げるなよ』

血みtainな真つ赤な目で睨まれて、さらにその一言で全身が固まって、そのまま意識が飛んだから。たぶん蛇に睨まれた蛙のような状態になっているんだろうな。刷り込み、っていうんだっけ。

「炎弾！」

「爆砕符！」

壁の向こう側で大声がして、音が先か建物が揺れるのが先か。どちらが先か、それとも同時かはわからないけど、何かが爆発する音と一緒に、建物全体が大きく揺れる。パラパラといくつかのコンクリート片が頭に落ちてきたので、少し払ってから上を見る。

壁の一部が剥がれて、大きなコンクリートの塊が今まさに私の頭上に落ちてこようとしていた。赤い錆が浮かんだ鉄筋と、数本のワイヤーがギシギシと音を立てて、落ちてきそうなコンクリ片を支えている。

「……きゃっ！」

そこへまた、さっきよりも大きな振動がやってくる。バキン、と

あまり耳によくはない音が頭上から聞こえてきた。次いでブチ、ブチ……ブチというなにかのちぎれる音。

血の気が引いていくのがわかる。明らかに逃げないとマズイ状況なのに、首から下が動かない。ただ重力に引かれて落ちようとするコンクリを、欲しいオモチャを前にした子供のように、ジッと見つめる以外何もできない。

ワイヤーの最後の一本が、音を立ててちぎれた。

「……」

全身の血液が凍りつくような感覚。一瞬で、生命にしがみつくとを諦めた。

重力に反して宙に浮いていた塊は、束縛を引きちぎり、物理法則に従って垂直に落下を始める。

ああ、私は死ぬんだ。あの見るからに重そうなコンクリの下敷きになって、圧死するんだ。化物に食われるのと、一体どっちがマシなんだろうか。

多分、こっちなかな。一瞬で死ぬから。

目の前に迫る塊に対し、私はまぶたを閉じる。動けないなら、諦める以外の選択肢なんて存在しないだろうし。

ドスン、と大きな音が横から聞こえた。体は、怪我をした手のひら以外は全く痛くない。目を開くと、私の上に落ちるはずだった塊が、ずいぶんと離れたところに落ちていて、目の前にはあの化物が。

助けてくれたの？ それともエサがなくなると困るから？

気がつけば、白目のない真っ黒な瞳に吸い込まれるように立ち上がり、倒れかかるようにして抱きついていていた。

side out

side ????

気がつけば、真っ暗な闇の中を走っていた。漂白剤でも被ったのかと言われるほど白い自分の手足すらも見えないほど位闇の中。足元も当然見えないので、一寸先が崖でもし落ちたらどうしようかと考えながら、ひたすら足を動かしていた。走る理由は何かが追ってくるから。それが何かはわからないが、とにかく恐ろしいものだということは何となくわかった。だからその何かから逃げるために必死で走った。追いつかれればどうなるかは、なんとなく理解できたから、必死で逃げた。

たぶん火事場の馬鹿力みたいで、陸上部も真っ青なスピードで逃げているのだろう。それなのに疲れを感じない。これだけ全力疾走していれば、すぐに心臓が悲鳴を上げるのに、その心臓の鼓動も感じない。気がつけば呼吸までせずに走っていた。

必死で逃げていると、不意に目の前に現れた真っ白な扉にぶつかった。さっきまでは何もなかった空間に突如として現れた扉に対して文句を言おうとしたが、すぐ後ろまで迫ってくる『何か』の恐ろしさに咄嗟にドアノブを回し、ドアを開いて向こう側へ飛び込んだ。体をぶつけた痛み顔に顔をしかめていたが、扉がなんなのか、どこへ続くのかを考えなかった。ただあの真っ暗闇の世界の出口であるこ

とを期待した。

ドアを閉めると、周りが光に包まれる。閉めるときに何か妙な手応えがし、床に何かが落ちたような気がした。気がした、ではない。実際に、何かが落ちていた。白を侵食しようとする黒い触手。慌てて踏み潰すと、白に溶けて消えていった。

ドアを背もたれにして一息つくが、まだ安心はできない。ドア越しに粘質のものがこすれあう不愉快な音が聞こえてくるので、間違いないこの向こう側には無形の化物がうごめいている。

ドアから背を離して立ち上がると、不意に何かに抱きしめられるような感じがして、今度は天地がひっくり返ったように視界が反転し、上も下もわからないままにどこかへ引っ張られていった。

眼を開くと、銀に近い白の髪の毛が視界いっぱい広がっていた。記憶の中にこんな奇抜な髪の色をしている人間は一人しか居ない。離れようとするが、何故か力強く抱きしめられていて離れられない。突然の事態に脳みそに過負荷がかかってオーバーヒートを起こすが、すぐに平静を取り戻す。

とりあえず落ち着こう。なんでこんな状況になっているのかは記憶にないからわからないが、とりあえず離れてもらわないと色々困る。本能とか、その他いろいろで。

「ちょっと、離れてくれないか」

「……」

婦女子に抱きつかれるという経験が今までにないので、心臓が五百メートル全力疾走をしたかのように早鐘を打っている。それと、背中に回されている手が、やけに熱を持っているような気がして仕方ない。

「は？」

……俺はいつから隠れ紳士から殺人鬼にジヨブチェンジしたのだろうか。白に近い灰色だったジャケットが見事に血で真っ赤に染色されてしまっている。あとはある程度健康的に焼けていた肌が病的に真っ白になってて、爪が異様に伸びている。あと歯のかみ合わせもおかしいような気がする。劇的ビ オー・アフターの匠も真っ白だ。

しかし、落ち着いて考えてみれば血まみれの犯罪者然とした格好でも、全裸よりはマシだろう。全裸と血まみれの服、どちらがマシかと聞かれれば、どちらとも言えない。しかしこのまま進展がないのは、少々まずい。離れてもらわないと社会的に死ぬ。離れられても死ぬ。どっちにしる死ぬ。

「あ……意識、戻ったんだ」

「あ、ああ……まあ」

とりあえず、一度深呼吸して、素数を数えながら心を落ちつける。二、三、五、七、十一、十三、十七、十九、二十三、二十九、三十一、三十七、四十一……よし、十分落ち着いた。落ち着いたら、次はこの状況をどう打破するかを考える。

このままじっとしている？ 現状打破するための案を考えてるのに維持してどうする。

堂々と離れる？ 悲鳴を上げられるとアウトだ。いや、待て。今の

状態だと、相手が抱きついてきている格好になる。つまり相手は俺が血まみれなのをすで見ている。血まみれの服を着た俺に抱きついてきたということは、別に見られても問題ないのか？ 否。見て喜ぶ趣味など無いだろう。

なにか無いかと周りを見るが、軽く絶望した。あるにはあった。だが、それは壁についた赤色のペンキをホースでぶちまけたかのような汚れの下に、もはや人の形をとどめていない『化物』にまとりつく血まみれの布でしかなくなっていた。脱がせば一応服としての形は留めてるんだろうが、血の匂いがひどいだろう。

「えっと、少しだけ目をつぶって離れていただけですでしょうか。あと離れても、いいというまで目を開けないでください。お願いします」

あれを着ても現状と何も変わらない。仕方ない、たとえ血まみれの服を着て、殺人鬼と間違えられようと、それは後で調べれば必ず誤解とわかる。いくら一時であろうと人殺しの濡れ衣を着せられるのは気分が悪い。しかし露出魔だと、釈明のしようがない。変態、痴漢、露出狂などと叫ばれた日には我が心は完全に、砂でできた城に水をかけるかのように崩れてしまうだろう。さらに近所のおばさま方に小声で噂をされ、孤立する日々が待っている。ならば俺は殺人鬼の誤解を選ぶ。

「……………」

背中に回されていた手が離れたので、一歩ずつゆっくりと後ろに下がる。完全に離れたところで、崩れていない柱の裏にダッシュする。

そういえば、自分がなんで生きているのかが不思議だが、多分あ

れだろう。オカルト的ななにかということ納得しておこう。肉体の生命活動が停止したのに、魂が別の肉体に宿るなんてそんなのは非科学的だ。科学万能のこのご時世に、科学では起こりえない。成し得ない事が、小市民である俺に理解できるはずがないし、する気もない。

改めて、自分の体を見下ろす。服は血まみれで、どこから見ても立派な不審者。その血が自分の血液なのだから、笑えない。気になつて化物に噛まれた喉を触ると、ちょうど喉仏のあたりが、切れ味の悪い刃物で抉り取られたように、あるいは千切られたように、肉の繊維が立っている。痛みを感じなかったのは不幸中の幸いか。そして俺の姿をした化物の頭は遠くに落ちていて、未練があるかのように今の俺を見つめている。しかし、俺は生きている。だから未練もくそもない。

唯一未練があるとすれば……

「……はあ、お気に入りだったのに」

バイトして、初の給料で買ったという思い入れもあり、気に入っていたグレーのジャケットが血の色で真っ赤に染まっていることだろうか。生きているならそれに越したことがないが、気に入っていたものが無くなるのは少し悲しいような気もする。命かジャケットかと問われれば、迷うこと無く命と答えるだろうか。ああ、そうか。俺の命の代わりに、このジャケットに落とせない汚れがついたのか。

……自分で考えてあれだが、ねーよ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4716v/>

---

シルバーコード

2012年1月6日10時51分発行